

は、異なったもの同士が、そのもの自体を超えたところで互いに結ばれる存在の神秘に満ちみちているからである。

文化交流の手伝いもまた、氏の重要な仕事のひとつである。そのお世話になった人も多いただろう。日本を訪れる各国の若い美術家がしばしばアトリエにわらじを脱ぐ。そしてしばらく逗留して制作して行くこともある。

数年前、現代日本の版画家の重要な仕事を世界に紹介するべく大着を出版したが、その企画から取材、作家とのインタビューはもとより、その製作過程、作品の撮影まで一人でやってのけたタフガイでもある。

現代日本美術のカナダへの紹介、カナダの現代美術の日本への紹介のための展示会の企画など、実にまめに協力している。

その他、美術に関する著作がいくつかあり、目下、美術における物語性をテーマに、世界のあらゆる美術（日本の絵巻物、宇治拾遺なども含まれる）を探索している。

世界をめくって撮りためた美術関係のスライドを持って、依頼があれば講演にも出かける。

ここで氏の属する日本のカトリック教会における活躍に言及しなければ、片手落ちのそしりを受けるだろう。それは一般の人びとの目にふれる機会が少ないだけで、広く日本各地に存在する典礼美術の分野である。

一九六〇年代のはじめ、第二バチカ

ン公会議でカトリック教会の社会との関わり方に大変革がもたらされた。それまでのどちらかというと消極的であった関わりが積極的な方向に転じたのである。

それは当然のことだが典礼の刷新に及び、それまではヨーロッパ中世までに完成された様式を踏襲あるいはアレンジをすればこと足りていた教会建築、典礼美術、典礼音楽は、対応を求められて新しい創造の時代に突入した。

それまでのものは、神学を含めて、キリスト教の本質と、直面する現実に立つて問い直し洗い直さなければならなくなつた。日本でも古い聖堂の改修、新しい聖堂の計画など、たくさんの相談がアチ氏のところに持ちこまれた。規範も前例もないこの分野は、まさにアチ氏の本領とするところで、しっかりと神学に根ざした、しかも現代世界に対する卓越した氏の識見によって、それらは次々に実現していった。

おそらくそれらは、これからも続く創造の踏石として、すべての人にとって共有の財産となるだろう。しかもアチ氏はそれらを氏一人の仕事とはせず、日本人の協働者を育てる機会にしたのである。日本の教会はまことによき人を待た。

渋谷の一区民である氏は、区民の美術展に出品して受賞するとか、沿線の住人として私鉄の広報紙に登場するとか、地域にとけこんでいる。今日ももしかすると、道元坂のどこかの店で焼鳥や刺身で一杯やっている氏を見かけるかも知れない。(建築家)

## ジム・マレー

# サケと古武道で結ぶ民間大使

吉崎 昌一

カナダよりも日本に滞在している方が多いと信じられている怪人物。かなり以前からテレビのフィッシング番組に登場し、その精悍かつハンサムな顔と巨軀は日本のスポーツ・フィッシャーマンのなかでは、つとに有名であった。矢口高雄氏作『釣りキチ三平』がベストセラーになると、氏の名前は子供達の間でもよく知られるようになる。この漫画の中で、三平をむかえるカナダのサーモン・ターピの会長として、実名で描かれているからだ。カナダのサケつりは、ルアー・フィッシングに夢中になったヤングのあこがれの的である。



マレー氏

だがマレー氏は単なるつりの名人だけではない。サケ資源保護の旗頭の一人としても著名である。かつて太平洋国際サケ委員会のカナダ代表を六年間にわたつてつとめ、現在は太平洋サケ協会の副会長として東奔西走している。日本でカム

バック・サーモン運動がはじまったのを見るや、これを全面的に応援、しばしば札幌を訪れ、いくつかの学校をまわってサケやサケの棲める河川環境が、いかに人類にとって重要かを説いて歩く。子供達は熱狂した。あこがれの人物が目の前に現れ、ニコニコしながら握手してくれるのである。サケおじさん、アングルサーモン、いつのまにかこれが氏のよび名になってしまった。このことがどの位日本の運動にプラスになったか、測りしれないといつてよい。

だが、もつとも重要なことは、マレー氏が同様の運動をただちにプリティッシュ・コロンビアでも開始したことである。太平洋サケ協会のメンバーを動かし、この地最大の新聞発行部数をもつバンクーバー・サン紙と語らつてセイウ・サ・サーモン協会を組織したのである。そしてカナダ連邦政府が数年来おこなっていたSALMONID ENHANCEMENT PROGRAM (サケ増殖委員会)を支援して大がかりな住民運動を展開した。その結果、サケに関する住民運動は、国際的なひろがりを持つことになった。北海道石狩町とキャンベル・リバー市との姉妹提携、二百五十校をこえる相互の学校交流の計画がすでに動きはじめている。その